

山口県下の「新教育」実践に学ぶ(四)
——「阿武郡国語同人会」の場合——

加藤 宏文

What the "Re-education" after the World War II
in Yamaguchi prefecture can tell us. (4)
— in the case of the coterie on
Japanese Education in Abu district —

Hirofumi Kato

(Received November 21, 1994)

キーワード 「新教育」

はじめに

敗戦直後の一九四六(昭和二一)年五月一五日付刊行の『新教育指針』で、文部省は、特に「個性の完成」の真意を説いて、「新教育」の出版を促した。それは、「社会におけるその人の役割を完全にはたすことになる」(注1)に力点を置いたものであった。この理念は、いち早く国語教育にも新生面を求めさせ、従来の歪んだ一斉授業は、協同学習的な性質への変革をも目指させた。たとえば、具体的には、「駄問駄答を排せよ」とのスローガンは、「児童の駄問は必ずしも排斥すべきではない」という反省にも至るといった具

合であった。「学級児童のすべてが関心をもって参加する一斉授業とならなければ」(注2)の謂いからであった。

しかしながら、その上で各教室で探求された「単元学習」は、「国語教育の現段階から、『学習』に力をおきたい」あるいは「『単元』の問題をさしおいて、『学習』の問題を実践的に解決したい」(注3)という述懐に見られたように、理念と実践との間にすでに大きな齟齬を生じていた。実践の苦闘は、始まっていた。

このような時代の単元学習の評価は、現在それほど分析的・具体的ではなく、単に「はいまわる単元学習」とか「ゾウスイ学習」とかと当時揶揄されたのをそのままに、「今日の単元学習の理念からすると、少なくとも実践のレベルにおいては、昭和二十年代には国語科単元学習はごく例外的存在であった」(注4)と、否定的にあしらわれるにとどまっている。果たして、そうなのか。

中で、管見に入りつゝある山口県下の同時代の「新教育」実践の主なものは、次の三つである。

A 『生活学習研究 桜山教育プラン』下関市立桜山小学校著 一九四九(昭和二四)年一月五日刊(注5)

B 『生活実践と実力養成のための 小中学校のカリキュラム』山口大学山口師範学校光附属小学校著 一九四九(昭和二四)年一月一〇日刊(注6)

C 『新国語教科書を基にした 小学校国語科教育課程の構成と展開(中学年)』山口県阿武郡国語同人会著 一九五一(昭和二六)年五月一六日刊

本論は、AおよびB等についての拙論にひきつゞき、山口県下の「新教育」実践に学ぶべく、Cについて「単元学習」における国語教育の位置を中心に考究したものである。

—
では、右のような「新教育」理念は、山口県下では当時どのような受け止められていたのか。

敗戦直後から、全国規模の講習会・研究大会・発表会・種々の雑誌・著作を通して、「新教育」の理想を情熱的に探求し始めていた県下の実践家達は、その中で、カリキュラムの「作成」そのことと「如何に」学習させるかの問題に、いち早く苦闘していた。

(1) この度の研究会の主題は、「単元学習の実践的研究」であった。勿論そのねらいは、学習指導の面にあつたのであるが、

必然、指導計画以前の教育計画が問題となつたのである。／ここに浮かんだ二つのこと、それは即ちカリキュラムとガイダンスである。「何を」「如何に」の問題である。／政治が天皇の手から民衆の手に移つた如く、教科書の作製（教科課程の作製）も文部省の手から、教育研究の手に移つて来たのである。同時にその内容は、理論的教材から心理的教材へと発展したのである。教材の教授でなく、生活（経験）の指導である。

「何を」生活させ、経験させるかは、新教育の教師に与えられた、大きな課題の一つである。生きたその地方の児童の欲求や興味に即応し、その地域社会の要求に一致する計画案でなくてはならないのである。が、そこに準急的進み方と、特急的進み方とである。前者は、教科を修正した行き方であり、後者は教科の枠をはずして、コア、カリキュラムとして生活の中核をとらえて指導しようとするものである。今どちらのカリキュラムが良で、どちらが否であるかを決定することは出来がたい。出来がたいだけに問題は残るわけである。／次はこの計画案

を「如何に」経験させ、指導するかである。記憶注入をこととし、如何によく記憶させたかによつて、教師の優劣が決定されていた旧教育は、民主的、自由的、自発的学習へと切りかへられ、自ら欲求を満足させ、問題解決させるといつた、指導法にとつて変り、この「如何に」自発的に学習させるかが、教師の痛切な問題となつてきたのである。カリキュラムを作ることに、そのカリキュラムを如何に自発的に学習させたらよいのかの重大性が今度の研究会で再確認され研究にピッチをあげざるを得なくなつた、二つのことである。（注7）（傍線加藤。以下同じ。）

それは、突き詰めれば、過去の文化と伝統に重点を置くか、それとも、現在と未来の社会に重点を置くかに至る。先学は、それを見抜いていた。国語科教育は、このような思潮の下、社会科・理科的内容の生活経験学習の主導の下で、試行錯誤をつづけていく。

(2) 教科カリキュラムは社会に存在する文化財から出発して、幼少な児童に之が理解体得をなさしめようと、するものであつて、教材と児童は二元的に対立し、その指導の規範は教材に内在する。教材は価値あるものであるから、児童は興味のあるなしに拘らず、その教材を習得しなければならぬ。児童は教材の論理に従つて、系統的に教材を習得する。之に対して生活カリキュラムに於ては、児童は生活の問題に当面する。其の問題を解決するには色々の文化財を手段として使用しなければならぬ。こゝに色々の教科の教材は生活改造の手段として登場する。生活問題を解決する毎に、知識・理解・技能を増し、態度が改善せられる。此の何れが教育の本質に適合しているか。その解答は過去の文化と伝統に重点を置くか、現在と未来の社会

に重点を置くかの相違によって異なるであろう。(注8)

このような葛藤の中で、先学達は、仕事や問題を解決する力を高め、推論し実証した知識を獲得させることに、努めていた。思想・感情をはつきりさせる。その力を育てるために、順序・方法を探求することによって、「読む・わかる」をも実現しようとしていた。

(3) ◎ ふしの川を下る / という社会科の単元を用意しております。この単元はどのような目標を達することができるとでしょうか。この山口市でこの組の子供で——と、かみしめるような気持ちで指導要領をめぐってみます。(以下、加藤要約。)

① 河川が人間の生活にどう関連しているかを、具体的に確実にわからせる。児童は、橋に強い関心・意欲を持っている。

やらせる・まとめる・発見理解するために、1、手順を立てる。2、見当を話し合う。3、まとめ方を相談する。4、報告する。——を指導し、橋の愛護精神を育む。そこから、水車・灌溉へと広がる。

② 農耕・植林が、私たちに与える過去・将来の影響や相互依存のありさまを理解させる。「何を」(見せ・調べさせ・聞かせ・読ませ・話し合わせ)に悩むが、仕事や問題を解決する力を高め、推論し実証した知識を持たせたい。

◎ 単元展開のため、「ふしの河畔の立体模型を、うんと研究して作りあげる。」

① 地面はどのようになっているか。—— 理科学習の重要な現場

② 竹笛を作って吹く。鳥瞰図の書き方。—— 図画・工作の重要な現場。

①・② は、「修正カリキュラム」構成の「断面図

③ (この項、原文のまゝ。) 次に言語指導の計画に進んでみます。その場その場の、必要や興味に立って、きめ細かい指導を加えていきますことは、言語指導の原則でありましようが、『ふしの川を下る』ことに、紀行の意味をもたせることはどんなものかと思えます。社会や自然の研究に出かける心構えと、詩作に出かける心構えとは、相当へだたりがあるものと思われまます。(中略) うさぎをそだてる計画を二学期から相談して、そのことの算段もありますし、／ ◎ うちのほおじろ(国語 第四学年中) / ◎ あぶらぜみ(同じ) / の二つを通して、観察の底にひそむ愛情にふれていって、自分達の生活をふりかえってみる。そして、細々とした表現の中に、実は自分の持っている思想や感情をはつきりさせることができるのだということを、押しつめて行かせたいと考えているのであります。『放送ごっこ』という六月の国語の単元は、放送するという生活の中で、がっちり教材に取組んでいきましたので、保護者の方も、意外と思われる程能力をあげることができましたが、うわすべりで、論理性のない、花火的な読解の幼稚な姿を、その時もみせつけられまして、なんとかこれはもつと質の向上をはからねばならないと痛切に感じたのであります。文を読む、わかるというためには、かくかくの順序や方法があり、通読「ペンをくりかえしていったのでは、私たちの心や表現はそだたない、ひとつ新学期のまっはじめを機会に、どのような文を読み研究していったらよいかということ、計画を立てては進みながらかんがえていってみたい。こう考えて居ります。(後略)

(注9)

このような苦闘の中で浮き彫りになってきたのが、生活体系による経験だけでは獲得できない、重要な学習内容が、各科目別個の問題としてある、という実情であった。このような切実な問題意識の中から、県下各地で紡ぎ出されたのが、前述の二つの『プラン』をはじめとする諸『プラン』であった。

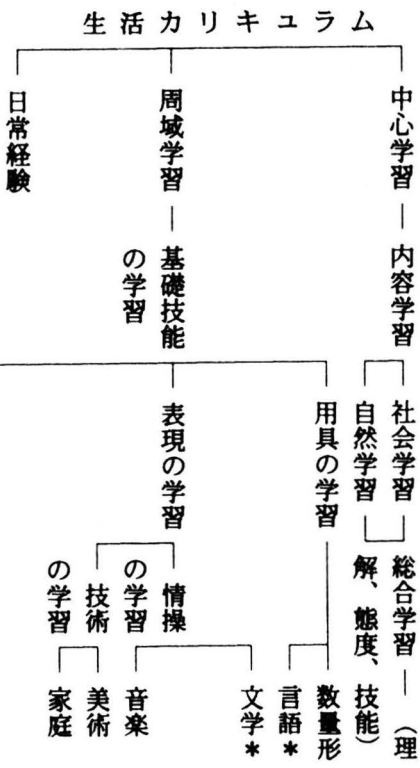
(4) (前略) 以上のような現実の状態からして、カリキュラムを構成するとするならば、次のような形態のものも特異な一つの型として比較的容易に而も、確かな教育をするために有効ではないかと思えます。それは、学習者の生活の中心をなす主要な興味或は関心あるものをとりあげて、それを子供の生活の体系に並べて行きます。つまり子供の切実な問題の系列を作るわけでありませう。これだけを眺めますと一応、生活カリキュラムの様な観を呈しますが、そうした生活課題解決の道程に、どの様な教科的能力を与え経験させることが出来るかを拾って見ます。一方、教科研究部を中心にして、各教科的に見てどのような能力を育て、行けばよいのかの系列をはっきりしておきます。そして、前者の子供の生活体系の過程に達せられる経験の内容を、後の教科的な能力体系と照合して見て、能力表の中から抜きとって行きます。そうすると、能力表の中に、残って来る内容がたくさん出て来ると思えます。つまり生活体系による経験では獲得することの出来ない、而も重要だと思われる内容が発見出来るわけです。この残されたものを、各科目別に生活体系によるカリキュラムより別個に組織立て、行く方法であります。

(後略) (注10)

中でのいち早い例は、新設されたばかりの下関市立桜山小学校の

『プラン』である。ここでは、「国語」を「中心学習」に対する「周域学習」下の「基礎技能の学習」とし、「用具の学習」(言語)と「表現の学習」(文学)とにまたがるものとして、位置づける。「中心学習で切実な必要感を起した時に、周域学習をする」との考えに基づくものである。(4)の問題解決への一方法であった。

(5) (加藤注。*印を合わせ「国語」とする。一部加藤略。)



◇ 個人的欲求による学習

(注11)

一方、ほぼ同時期に発表された『光プラン』は、同じ問題にぶつかり、それを「生活課程」と「研究課程」との二本柱の「相補」という「学習指導の実際」に即した理論の開発によって、解決しようとしていった。

(6) 中心教科と周辺教科というように一方を中心位置に置いて他方をこれに対して従属的位置に置くのではなくて、生活課程

と研究課程とは全く同等の価値をもって並列される。人間生活の実質的内容をなすところの文化価値の追求、創造という意味からすれば、むしろ研究課程の方が中心的位置を占めるとさえ考えられるであろう。しかしこの両課程は互に無関係に並立するのでなくて、全き姿の教育活動の形式と内容の両面をそれぞれ担当して、互に相補いあつて行くものである。この互いに相補うところにわれわれのカリキュラムの真の狙いがあるのであるのであつて、学習指導の実際に當つて最も苦心するものもこの点にある。(注12)

山口県下における「新教育」のこのような受容の実態は、なお資料の博搜と比較分析に待たなければならぬが、こゝには、夙に倉澤栄吉博士が指摘されたように(注3)、理念に傾きがちであつた「単元」作りの側面と実践に直面した時の「学習」の側面との、葛藤があろう。県下におけるこれらの苦闘は、「ゾウスイ学習」とか「今日の単元学習の理念から」とかと一蹴するには、あまりにも重い問題を今日の「新しい教育観」論議にも提起していることは、確かである。この時点からほぼ一年半後の県下の動向の一つを、具体的に吟味し、その意義と学ぶべき点を明らかにしたい。

二

山口県阿武郡国語同人会著 『新国語教科書を基にした 小学校国語科教育課程の 構成と展開 (中学年)』は、次の目次を持つ。

総説 目次

- 第一章 教科カリキュラムか経験カリキュラムか
- 第二章 国語の教育課程
- 第三章 国語の教育範囲

第四章 国語教育の目標

第五章 単元学習

第一節 単元学習の意義

第二節 単元の計画と構成

第六章 言語作品

第七章 国語教育の評価

第八章 国語の時間配当

第九章 国語科単元一覧表

単元展開案

(以上)

山口県阿武郡は、島根県津和野に隣接する地域である。その徳佐小学校・亀山小学校を中心とした実践家の研究・実践集団が、「国語同人会」である。同会は、敗戦直後から、夙に大きな視野に立つて研究・実践・討議をつづけてきて、当時の「新教育」の思潮や動向をも批判的に受容しつつ、実践の中でそれを吟味していった。「国語」が単独で対象になったこと、「新教科書」への対処の関係を具体的に突き詰めていったことなど、その独自性が注目される。

中で、「何とかして阿武郡の国語教育を」の真摯な思いが、「本当の単元(題材)学習」を追究させている。それは、理論的な説明によつてなされるものではなくて、多くの実践上の問題を解決していくことの中でこそ、達成されるものであるとの信念に基づいている。「実践の場に於いてその課題を解決する努力を」は、その謂いである。同著の「自序」は、その決意をこう述べている。

(1) 「国語カリキュラム」というようなことは、阿武郡の国語同人会のような小さなグループの到底為し得る業ではありません。然し「何とかして阿武郡の国語教育を」という気持ちから敢えてこの冒険を試みたのであります。 / 新しい国語教育

の方向が単元学習にむかっていることは事実でありましょう。しかしながら「これは本当の単元(教材)学習である」と示されたものは遺憾ながら未だ見当らないのであります。たとえ単元(題材)学習ということが論理的に説明出来たとしても、本当の単元(題材)学習は現在の段階ではまだ多くの実践上の問題が残つて来ると思われるのであります。然し私達は実践の場に於いてその課題を解決する努力を怠つてはならないのであります。着実にしかも成るべく早くその問題をかちとらなければなりません。(後略)(同著 自序 昭和二六年三月 阿武郡 国語同人会々長 小河正介)

この信念は、「新国語教科書」を手にした時、「カリキュラム構造に於ける統合と分析という二つの相反する概念」を確認させた上で、「教科カリキュラムの伝統を是認しながら、これに経験的色彩を加味して行く」行き方を採らせる。第一章 結語 は言う。

(2) 新教育が叫ばれると旧教育は全く無価値の如く考えることはきわめて危険なことである。／カリキュラム構造に於ける統合と分析という二つの相反する概念は、どちらか一方に偏するならば混乱が生ずるのである。両者はそれぞれの特徴を認め、長短を追求して相互に関連をもつところに止揚された教育課程が生まれるのではないか。日本の現状を無視した、飛躍したカリキュラムの構成はなすべきではないのである。／各教科がそれなりに、単元的に再編成され、それが相互に関連をもちながら、改造を重ねて行くという漸進的な改造であらねばならぬ。教科カリキュラムの伝統を是認しながら、これに経験的色彩を加味して行くところにあたらしいカリキュラムの行き方があると思うのである。

この考え方は、「学校や先生の責任に於て地域や学校や個人個人に即する学習指導の計画」を、目指させた。次の①②③④は、その上に立つた「国語の教育課程」の「構成手続」の具体である。中で、⑥「児童の発達段階と言語能力」・⑦「単元と教科書との関係」・⑧「言語要素」——の三点については、現実的な「手続」を選択している。これは、(1)・(2)で突き詰められた一つの見識に基づくものとして、実践上の具体の国語科学習指導法に及ぼした影響が、想像される。第二章 国語教育課程作製手続き は言う。

(3) カリキュラムと言う言葉はどんな事を(学習内容)どんな風に(学習方法)するかと言う一設計する「組織する」ことである。学校や先生の責任に於て地域や学校や各個人個人に即する学習指導の計画を樹てる訳である。その地域、その学校に即して、どんなことを学習内容とし、どんなふうにならそれを組織するかはその教師に任されている筈である。そこで先づ国語の教育課程はどうして作製したか、その構成手続について述べることにする。

- ① 教育全体構造に於ける国語カリキュラムの性格について考えて見た。
- ② 次にその教育全体計画の中で占める国語科の位置づけ、すなわち国語教育の範囲を究めることとした。
- ③ 教育の一般目標から導かれた国語科の指導目標を学年的系統的に考えた。
- ④ この指導目標を達成するためには、どんな経験を組織したらよいかという学習内容(単元又は話題の内容)を決定した。
- ⑤ その組織した経験をいくつかに纏めて、年次計画を定めた。
- ⑥ 更に之を如何に指導するかと言うために、児童の発達段階と言語能力を一応考えた(これは実態調査に基づく科学的研

究でなければならぬが、実際はその様なものがないので、今迄発表された文献及洞察によつた。

⑦ 以上国語教育の範囲と排列の基準をきめ、各学年の学習内容と学年の指導目標を決定したのであるが、更に資料を如何にとり入れるか、即ち単元と教科書との関係をどうするかと云うことについて、教科書研究を徹底した。

⑧ 言語要素（発音、文字、語い、文法、修辭）について系統的なものを定めて置くべきであると考へたが、これは言語作品の章で述べてあるように、検定教科書に依存した。（後略）
「山口県阿武郡国語同人会」の苦闘の中からのこのような真摯な企図は、このような体系（目次）によつて提示された。以下、その具体的な実践計画における国語科教育の位置づけ方を、吟味する。

三

同著では、その第四章で、国語科学習指導の実態が、まず厳しく反省されている。すなわち、「学習指導要領（試案）」に言う「国語科学習指導の目標は、児童生徒に対し、聞くこと、話すこと、読むこと、綴ること、に依つてあらゆる環境に於ける言葉づかいに熟達させる様な経験を与えることである。」に注目して、今迄の実態が、「狭い教室内の技術」・「窮屈な読解」・「形式に捉われた作文」であつたことを、直視して出発する。第四章では、昭和二十二年「学習指導要領（試案）」と「新指導要領（中間発表）」とを次のように対比して、国語教育の目標を再確認している。

（1）国語教育の目標（加藤注。○印が、「新」。）
① 表現意欲を盛んにし、活発な言語活動をすることに依つて社会生活を円滑にしようとする要求と能力とを発達させること

と。

○ 社会生活に適應して自分に必要な知識や情報を得て行く爲めに、他人の話に耳を傾ける習慣と態度を養い技能を磨くこと。（聞く）

② 自分を社会に適應させ、個性を伸ばし、他人を動かす手段として、効果的に、話したり、書いたりしようとする要求と能力とを発達させること。

○ 自分の意を伝えて、他人を動かす爲めに、生き生きとした話をしようとする習慣と態度を養い、技能を磨くこと。（話すこと）

③ 知識を求めめるため、娯樂のため、豊かな文学を味わう爲という様な色々な場合に応ずる読書の仕方を身につけようとする要求と能力とを発達させること。

○ 知識や情報を獲得するために、経験を広めるため、娯樂と鑑賞爲め、広く読書しようとする習慣と態度を養い、技能を磨くこと。（読むこと）

④ 正しく美しい言葉を用いることによつて、社会生活を向上させようとする要求と能力とを発達させること。

○ 自分の考えを纏めたり、他人に訴えたりするために、はつきりと正しく、判り易く、独創的に書こうとする習慣と態度を養い、技能を磨くこと。（書くこと）（以上同著第四章）

こゝでの比較は、それぞれの文末に注目して、「習慣と態度を養い、技能を磨くこと」は、「只単なる知識でなく、人間として、知性豊かなること」共に、技能をもち態度、習慣に於ても遺憾のない人間像」の追究である、と見ている。

さらには、右の四項目が、ことばの働きという点で一体であるこ

とをも強調し、国語科学習指導においても、相互の関連学習が求められ、総合された学習の中にこれらの諸要素が織り込まれて、機能的に、総合的に、無理なく展開されるべきであるとしている。さらに、関つては、地域・学校・学級・児童各自に応じた具体的目標もが、求められている。特に、単元学習の実際の際には、児童の側からの観点に立つて、その目標が多彩であるべきはずの実態を指摘し、具体的目標を独自に選ぶべきことを、改めて強調している。

次には、「能力表」の問題が提起されている。すなわち、いわゆる「能力表」を、「社会の要求に基いた教育目標設定」にとつて必須なものとした上で、まずは、「現場で具体化される」べきののだとしている。「担任が受持ち児童の個々の実態に即して、現場の実績に於て具体的に構成」されるものの謂いである。この「動的なものゝ把握」を重視した考えは、さらに、「具体的な実践記録こそ、もつとも立派な能力表である」との見識を、導き出すに至っている。机上での綿密な「能力表」の作成作業に膨大なエネルギーが費やされがちであった中で、この見識は、普遍の原理をも浮き彫りにしたものである。注目される。

さらに注目されるのは、これが、「実践の過程に於て漸次改造して行く」べきものとしている点である。敗戦直後の混乱の中で、教育のあるべき理想像を唱える思潮が、「新教育」の名の下に押し寄せてきていた時、その理念の正しさには深い理解をしめしつつも、毎日目の前にする児童・生徒達の実情・実態を直視して、敢えてこのような困難な道を選択したことは、特筆に値する。「漸次」と「改造」との間に、同人諸賢の苦悩と情熱の跡が、見て取れよう。

(2) 国語の能力表

能力表はコアカリキュラムの主張として、いわゆる「社会生

活をして行く上に必要な能力、最低必要基準（ミニアム・エツセンシャル）を考へてカリキュラムを構成するために必要であるとされた。それは社会の要求に基いた教育目標設定ということが教育課程の編成又は改造になくはならないものであるからである。（中略）／国語の能力表が国語科の到達目標という使命があるのならその内容をはっきりとした具体的内容をもつたものでなければならぬ。一応の到達水準といふながらも現場で具体化されるものでなければならぬ。そこで作製に当つては、担任が受持ち児童の個々の実態に即して、現場の実績に於て具体的に構成したものがもつともよいと考えるのである。寧ろ構成というよりも動的なものゝ把握である。／抽象的

学習には当てはまらない場合が多いのである。四年生で、この力をつけるのに、この様な条件があり、この様に工夫したからこの様になったという具体的な実践記録に基かねばならないというのである。／即ち、一応は発表された文献としての多くの能力表を参考にはするが、個々の教師が個々の児童に指導した実践記録なり、評価の結果を累積して作られた、そうした具体的実践的記録こそ、もつとも立派な能力表であると考え（勿論これは厳密な科学的分析的基礎付けのある実態調査には欠けているが、）こうした現場に立つて作製されたものは、その児童の実情に即したものであり、単元展開の操作の上に、或は評価の上に最も実際に活用されて行くと思ふ。更に之を実践の過程に於て漸次改造して行くならば一番よいのではなからうか。／勿論能力表は標準的のものでなければならぬのであるから、文部省の中間発表の能力表に基くのが至当である

と考えるのである。(同著第四章)

この厳しい観点に立つて、国語科単元学習の実際は、具体的に探究されていくのである。第五章は、次のように突き詰める。

(3) 単元学習の意義

こゝで注意しなければならないことは、単元的方法であれ、規範無視、法則無視、体系無視で行くかということである。勿論そんなことはないのであつて、経験中心、興味中心に編成するには、その内面に於て十分系統を考え、法則を考えていなければならぬ。この方法の一つは心理主義、他は論理主義である。と評されるが、論理主義に徹底しようとすれば、心理主義になり、心理主義に徹しようとすれば論理主義になることは、他の場合と同一である。それならどちらでもよいとか或は両者の折衷がよいという論が生れて来るが、そうではなく、学習はいづも具体的な経験に即して、具体的な場に於て、興味をもつて個人々々の力に即してなされるのであつて、それは何時も心理的である。しかしそうした学習活動を準備し、教材を準備する教師の側には、体系的な計画、法則や規範の採り入れがあるべきで、それは、厳密に論理的である。この二つのことは同一の面にあるのではない。それを体系をむき出しにしたり、規範を露骨に示したところに従来 of 課章でき方法の誤があつたのである。(同著 第五章 第一節)

単元学習とは、教材を中心に考えれば、教材の組織を論理的・学問的体系に従つて、分節ある構成とすることであり、学習者の興味を中心と考えれば、その言動を重視して、発達段階に応ずる興味と要求を中心に、学習のまとまりを見ていくことである。——本著は、このような考え方に立つて、単元学習の意義を、学習者の側か

らと、教材を準備する教師の側とから、まずは分析的に考察した上で、その心理的側面と論理的側面との統合を目指すことに、意義を見出だそうとする。「新教育」は、この意義の具体化を通して、「従来の課章的方法の誤」りを乗り越えるべきものとの考えである。

本著は、その上で、自主的作成たるべき「作業単元」の性格を吟味し、アメリカにおける単元学習の考え方を紹介し、わが国において求められる国語単元学習について、①教材陶冶の系統を考える。②児童の実際生活から来る興味や必要に立つ。——の二つの面の交渉の止揚された座標の上に、その組織はうち建てられるべきであるとする。即ち、国語単元学習においても、「何を」学習するのかということと「どう」学習するのかということとの統合が、目指されている。以下、その具体的な計画とその構成とは、この考えの下に展開されるのである。

(4) 単元の計画と構成(加藤抄出。)

① 単元の計画と単元学習

(前略) 単元学習には何を学習するかということ、どう学習するかという問題がある。この二つのものは完全に一致して行かなければならないものである。単元計画と単元展開とを別々に考察することは誤りである。吾は指導の實際を日々記録し単元計画改善に資して行くところに本当のものが生れるのである。

② 単元の計画

1、単元の組織 2、単元の内容決定 3、展開の計画

③ 単元の選定と設定

一、子供の実態 二、国語力の現段階 三、子供の現在の生活環境 四、言語的環境 五、利用されるべき資料の状態

六、指導者の実力 七、要求すべき一般学力水準

④ 単元構成の基準

- 1、現実生活の中からの学習素材選択
- 2、言語活動の具体的生活事実との有機的関連
- 3、社会的要求への即応
- 4 児童の学習（興味・要求・自主的問題解決・協力学習・個人差・力動的言語経験）
- 5、知識の組織立て
- 6、反復練習
- 7、他教科との緊密な関連

⑤ 単元の形態

- 1、生活単元
- 2、教材単元
- 3、言語技術単元
- 4、題材単元（教科書にある題材による）

⑥ 単元一覧表の仮定

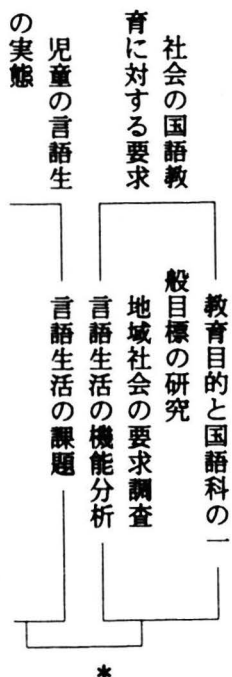
学習内容・学習目標・教科書及び資料の検討、決定。

⑦ 単元展開の方式

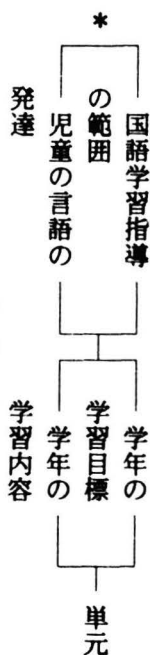
- 1、単元展開の六段階（設定の理由・目標・内容・資料・学習活動・評価）
- 2、単元の発展過程（動機づけ・環境の設定・実態調査・問題の把握・計画・解決への発表・報告・調査・研究・作業評価・発表）

⑧ 単元計画一覧表

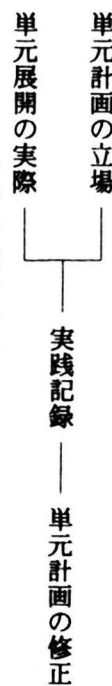
○ 〈学習目標と学習内容の設定〉



言語能力の発達



○ 〈単元計画の改造〉



（以下、加藤略。）（同著 第五章 第二節）

この具体的な「単元の計画と構成」に関して、本著は、「現段階では全学年を通じてはつきりした経験単元で貫くことは適切ではない。」とし、低学年では「生活単元的なもの」を多く、高学年になるに従って「言語単元的なもの」が多くなるのが自然である、としている。それは、単元の選定が、えてして子供の広い経験領域から興味ある話題を捉えると言いながら、「興味と必要（要求）」及び「能力（程度）」と言語発達段階の關係が混乱している実情を、直視している。実践の場からのやむにやまれぬ認識である。

その結果、「新国語教科書」教材を中核にしつゝ、③のような七項目を念頭に、教材単元から経験単元までに亘る各種の単元を、月一〜二単元選定することになっている。「七項目」においては、一〜四までと五〜七までとの要素が必然する關係を直視して、①に言う「指導の実際を日々記録し単元計画改善に資して」いこうとする態度を貫こうとしている。その理念体系は、⑧の図式に簡潔に纏められている。「単元の計画と構成」についての見解である。

次に本著が問題にするのは、「新国語教科書」への対応如何である。即ち、学習内容に関しては、「先ず教科書を取り上げて」研究し、基にし、即して「単元を設定する」としている。とりわけ、採用の教科書が、「各教材は作業単元の展開の媒介」たりえる特色を持つことを洞察し、さらに、単元間の連関・言語経験への配慮をも持つことを指摘してのことである。

この方向は、本著が随所で主張してきたように、「新教育」思潮のもと、「児童の個々の実態に即して、現場の実績に於て具体的に」「国語の能力表」を構成することが、体系や論理の観点においてとかく十分な学力涵養にはつながらないという反省に、厳しく基づいている。これは、前述の倉澤栄吉博士の指摘（はじめに）の（3））における、「『単元』の問題よりも『学習』の問題」にも通底した見識であつたといえよう。即ち、地域の実情をも考慮に入れて、体系的な計画・法則・規範はひとまずは「新教科書」のそれに糸口を求め、その実践過程に即して、「経験的色彩を加味して行く」と言うのである。本著の独自性の一つが、こゝにある。

(5) 「新国語教科書」への対応

① 昔の様に教科書は国定であり、方法は教科書の読解で終るといふのでなく、学習の目標に基いて、子供に即した話題を提供するのであるから資料の選択は自由である。然しそこに教科書を部分的にちよいちよい利用したり、思つきの資料を引用したのでは、せつかく作った単元（学習内容）を完全にはたすことは出来ない。単元に即した教科書を作るなら、これに越したことはない。然しそれは不可能である。そこで国語学習内容には先ず教科書を探り上げて之を研究し、之を基にして、之に即した単元を設定することにしたのである。

② 「新国語教科書」（光村）のスコープとシーケンス

○ それ自身、単元的に構成されており、各教材は作業単元の展開の媒介の役をするように出来ている。

○ しかも、その単元の一つ一つが互に緊密に関連し、言語経験を豊かにあたえるようになっていて、そのまゝでも単元学習が出来るように考えられている。

○ 文字・語彙・語法というようものが、きわめて科学的に研究されている。

一年（児童の身の生活）

上 入学当初の学校生活

中 戸外生活

下 家庭生活

二年（地域社会の生活）

上 田園生活

中 海と山

下 都市生活

三年（地域社会生活）

上 生活の視野の広い面

中 動植物と人間の関係

下 交通、運輸と人間の

関係

（同著 第六章）

四年（時間的意義の拡大）

上 地域社会の現在と過去

中 諸資源の保護利用と人間生活

下 生産消費の基礎理解

五年（文明）

上 自然と文明

中 天然資源の開発

下 現代日本、祖国再建

六年（文化）

上 現実的文化生活

中 文化の発達

下 世界の平和

さらに、本著では、評価の中枢を「学習とその指導」にあるとする。即ち、「なされた」こと・「なされつゝある」ことの発見であるとする。こゝには、「成長の価値」と「遂行の結果・完成の如何」とを峻別しようとする見識がある。これは、先に紹介した森下

巖氏の言う「協同学習的性質」がもとめられ、教師中心の一斉授業が根本的に反省されるに至った「新教育」の根本に関るとともに、かつ日々の実践に直結した問題であることを鋭く提起し、今日の「新しい学力観」にも、深く通底している。(注2)

(6) 国語教育に於ての評価は単なる国語のテストではない。もっと広く国語全体の全身の為に言語活動の総量をエバリユーションしなければならぬ。然し乍ら評価の中核をなすものは、学習とその指導である。即ち、国語教育の目標に対して、どの様に有効に適切に指導がなされているか。即ち学習効果の価値的判断がなされることである。そこで注意しなければならぬことは「……が出来たか、どうか」を判断するのではなくて、児童にどれだけの事がなされたか、又なされつゝあるかを発見することである。つまり成長の価値を見るのであって、遂行の結果や完成の如何だけを見定めるのではない。目標へもっとよく到達して行くにはどんな新しい処置と技術を用いたらよいかを考えて行くことである。(同著 第七章)

以上が、本書における「国語科単元学習」の実践計画である。

四

では、本書に見られる「国語単元学習」の指導の展開は、どのように具体化されていたのか。それを吟味して見たい。

(1) 国語科学習単元一覧表

	(一年)	(二年)	(三年)
四月	楽しい学校	二年生になつて	楽しい春
五月	楽しい学校	つゆあけ	子供の日
六月	水遊び	ことばしらべ	かんさつ日記

七月 七夕祭り・夏休
み
うたあつめ
(お話会)
夏休みを迎えて

九月 お月見・運動会
うんどう会

十月 秋の野山
お月見
短い文

十一月 私たちのうち
農家とお店
ラチオを聞いて

十二月 紙しばい
学級文庫
楽しい読みもの

一月 お正月・絵日記
郵便ごっこ
のりもの

二月 学芸会
学芸会
映画会

三月 春をむかえに
もうすぐ三年生
三年生のまとめ
(注。四年く六年分は、加藤省略。)

本書では、先に、「新国語教科書」(光村)の単元構成の特徴が紹介されていた。右の「展開」は、それに即して設定されたものである。こゝには、即しつゝも、児童にとつての地域の自然や生活やが、学年の段階を勘案した上で、具体的に組み込まれている。敗戦直後の混乱の中で、「教材」や「資料」にも極端に恵まれなかつた「国語教室」が、「新国語教科書」の優れた体系に学びつゝも、自らの独自性を、その理念に即して出来得るかぎり実現しようとした跡が、よく窺われる。今日の単元学習にも求められる、年間はもちろん、六年間を通しての体系が構築されている。

次に、中から、三年生の(単元展開案の例)を紹介する。

(2) (単元展開案の例) 三年

① 単元名・時間配当 —— 子供の日・二〇時間・五月上旬(下旬(四週間))

② 単元設定の理由

1、子供の日を中心とする五月の行事はそのまま、国家的な行事とつながり多様な祝賀気分の溢る月であり、大空に翻る

鯉のぼりの勇ましさを仰ぎみて平和日本の将来とその重責を荷せられた子供への期待は特に大なるものがある。

2、子供こそ日本の運命を左右する大切な宝である。子供達のこの自覚と責任とを感得させると同時にともすると大人の概念から忘れられ様とする子供達の生活の中に食い込んで祝福してやることは日本の悲運をまねいた大人の責任でもあらう。

3、子供達は互に友愛と協力とによつて平和日本の再建に努力するであらうことを信じてこの単元のもつ効果は大きいと思う。

4、教科書資料により言語活動の実際活用面と表現とを郵便とたんばばで学習し友愛の情を子供の日で学習しようとするものである。／言語生活を通じて我々の感情や思惟はよりよく疎通するものであることを体得するであらう。

〈目標〉（加藤注。以下、本書では、一覧表になつている。）
話す

一、だんだん言葉づかいに気をつける様になる。

二、正しいことづけが言えるようになる。

三、一つの話題について話がまとまる様になる。

四、表現をつけて話せる様になる。

聞く

一、不明なところをとりだしてきく事ができる。

二、質問の要領がわかる。

三、わかったところと不明のところの区別がつく。

四、静かにきくことができる。

読む

一、内容を考えながら微音読が出来る。

二、手紙文の大意がわかる。

三、長い劇の脚本がよめる。

四、分ち書きの意味がわかるようになる。

書く

一、簡単な手紙が書ける。

二、相手にわかり易くかける。

三、よみ返して仮名づかいや漢字の誤が訂正できる。

四、文字の大きさが大体揃つて書ける。

五、通信の規則が守られてかける。

文法

一、通信の規定がわかる。

二、仮名づかい、助詞のつかい方がわかる。

三、手紙文のかき方についての習慣が理解される。

〈予想される学習活動〉

一、子供の日についての話し合い

1、日本の新しく定められた祝日について話し合う。

2、「子供の日」と言う祝日が設けられた訳。

3、我々の心構についての話し合い。

二、児童福祉週間の行事について

1、運動会の計画について話す。

2、身体検査の結果についての反省。

3、家庭訪問の日取り、注意等の話し合い。

三、子供会の行事の計画を立てる。

1、計画を立てる。

2、保護者や関係者に案内の手紙をかく。

- 3、発表会の準備や材料を集める。
- 4、子供の会の発表をする。

四、教科書の資料をよんで反省する。

- 1、案内状について教科書の文をよんで反省する。
- 2、郵便の使命とその利用や手紙、はがきの書き方の練習をする。
- 3、劇たんぼをよんで劇のしかたを研究する。
- 4、配役をきめて劇をする。

五、資料

- 子供の日の読解により基礎的能力を養う。
- 友愛の情を育む。
- 希望にみちた子供の日の歌について意見を言い合い曲をつけて一同でうたう。

〈評価〉

- 「話し合」 観察 「発表の態度」 「案内函の書き方」
- 作品 「案内函の書き方」 ノート、作品 「発表」 観察 「綴文方」 作品 「表現」 観察 「読みの速さ」
- 観察 「書き方」 ノート

〈資料〉（加藤注。この項記入事項なし。）

〈他教科行事との関連〉

- メーデー 子供の日 憲法記念日 児童福祉週間 八十八夜 家庭訪問 「音楽」 鯉のぼり 茶つき 「社会」
- 憲法 郵便局 虫歯予防デー

即ち、この例では、「単元設定の理由」によると、本単元は、「子供への期待」を「子供達の生活の中に食い込んで祝福し」つゝ、「友愛と協力」との実現を目指すものである。同時に、具体的には

「教科書資料」を活かして「言語活動の実際活用面」とを錬磨しようとする。中で、〈目標〉は、「話す」・「聞く」・「読む」・「書く」・「文法」にわたり、「実際活用面」にこまやかな心配りがなされていることがわかる。また、〈予想される学習活動〉では、徹底した「話し合い」を通して、仕事や問題を解決するための基礎的態度が、錬成され、具体的な活動を経て「教科書資料」に至っている。また、その「五」の三つの「資料」は、それぞれ、先の二つの学習目標の達成の場として、総合的な学力をも視野に入れた周密な「展開案」になっている。その上での、学習指導過程に即した「評価」の諸項目も、多岐に亘って目配りがなされている。

本書では、「新国語教科書」に即してのこのような学習指導計画を、年間・各学年に亘って網羅している。ちなみに、第三学年末の「単元設定の理由」には、一年間学習してきた諸記録・諸作品を整理して、文集を作り、さらに、第四学年に備えての自己学習力に期待して、学習計画作成への誘いをも展覧している。各地域の実情に期待しつゝ、山口県阿武郡における「国語科単元学習」の実践的規範を示したものと見えよう。

五

さて、阿武郡国語同人会では、本著刊行（一九五一（昭和二六）年五月一六日）先駆けて、『阿武郡教育年報（小学校の部）』に、その理念と調査に基づく具体的な提案をしている。その冒頭には、同人代表であった小河正介亀山小学校校長が、その理念を次のように述べている。（注13）

○ 小学校低学年に於ける文法学習

文法教育は小学校の低学年から入らなければならない。しか

しそれは口語文法をばらばらに取り出して国語教育の中にさしみのつまみにそえることではない。低学年では特にことばの学習活動を通じて自然に子供の語法的現象をとらえて、それをつらぬく法則的なものを子供の経験に基づいて整理してやることである。その点低学年教科書の言語教材等が余程注意深く編集してあることがうかがえるのである。従ってその取扱いも文法的部分だけを取り出して説明するというようなことは拙いのであつて、子供の言語活動の中に現代国語をつらぬいている語法体系をはつきりつかませることである。言いかえれば「規則を教えるのでなくて、練習の中で規則をつかませる」ことである。

(中略) 然し乍らこのように文法指導は形式的知識的なものであつてはならないのであるが指導する先生は一応系統的な知識や体系的な背景というものを持つていなければならぬことは勿論である。しからは低学年の文法指導として国語文法の科学的体系的なものが示されているか。この問題については遺憾ながら現在研究されたものは皆無といつてよいのである。そこでわれわれは学習指導要領にはどう出ているか、文部省の能力表はどう示しているか、教科書ではどういうふうに出出されているか等を研究してみるのが一番よい方法であると思うのである。

このような理念に基づき、本「年報」は、A「教科書(光村図書)にはどう提出されているかその指導はどう考えたらいいか。」の表題の下に、次の一一の「要素」別に一〜三学年までの事項を、具体的に列挙している。

- 言語の有用性
- 共通語と方言、発音、アクセント、語勢、語調
- 話し言葉と文字言葉との関係
- 敬讓語
- 語

語いの拡がり ○ 品詞別の具体的理解 ○ 現代のかなづかい、句読点、表記法 ○ 文の構造 ○ 文体 ○ 活用 ○ 其他

また、同じくB「学習指導要領及能力表(文部省中間発表)にはどう示してあるか。」の表題の下にも、同じく三つの学年にわたつて、「特殊目標」に引き続き「書くこと」・「話すこと」・「読むこと」・「つくること」・「書くこと」の、各「指導の目標」・「指導の要領」が、一覧表で示されている。

これらの三年生における一部は、次のようである。

A 品詞別の具体的理解

○ 音便 咲いた(イ音便) 問うた(ウ音便) 死んだ(撥音便)

B 話すこと 勝った(促音便)

指導の目標

○ 正しいことばづかい、正しい語法、その場にあつた声の調子、話の内容による抑揚、話の進行による変化、その他それぞれの内容や場面にあつた自然の態度で話す。

指導の要領

○ 語いをひろげ、幼児語、方言、訛語、野卑なことばなどに気づくようにする。○ 児童の特殊用語、流行語を調査しその上に立つて指導する。

その上で、本「年報」は、「更に構成に当り教科書を縦に分析研究してみたのであるが、凡そ次のようなスコープとシークエンスによつて成り立っているのではないかと思われるのである。」とし、

次のような二つの一覧表を示している。

○	学年	一	年	二	年	三	年
---	----	---	---	---	---	---	---

学年	主題	上	中	下
四年	時局的意識の拡大	地域社会の現在と過去	諸資源の保護 利用と人間生活	生産消費の基礎 的理解
五年	文明	自然と文明	天然資源の開発	現代日本祖国再 建
六年	文化	現実的文化生活	文化の発達	世界の平和

主題	上	中	下
児童の身近生活	入学当初の学校生 児童の行動	戸外生活	家庭生活
地域社会の生活	田園生活	海と山	都市的生活
地域社会の生活	生活の視野の広 い面	動植物と人間関 係	交通運輸と人間 との関係

○

巻	上	中	下
五年	緑の国	地球	日本の朝
六年	わか草	新生	希望

巻	上	中	下
一年	かざぐるま	はらっぱ	日あたり
二年	子うま	ごむまり	友だち
三年	たんぼぼ	まきば	みどりの手旗
四年	そよ風	なぎさ	足あと

即ち、本著刊行に先立つ前年、同
同人会では、すでに「新教育」の理
念を受け止めて、このような具体的
な学習指導計画を立案していたので
ある。こゝには、「新国語教科書」
の系統性に学びつゝ児童の生活経験
に密着した指導体系を求めて止まな
い姿勢が、買われている。

おわりに

「国語科の新しい学力観に立つ教育」を旨指して、今日、特に次の
四点が指摘されている。言うところの「一人一人」とは、何か。

① 基礎的・基本的内容は、一定の知識や技能を中心に考えるの
ではなくて、意欲・思考力・判断力・表現力等の資質・能力の
育成を図るに必要なものである。

② それは、自己実現に役立つものとしての工夫を求める。

③ そのためには、個性の重視の考え方に立ち、その資質・能力を発揮できる場・時間を位置付ける。

④ さらに、学習者の側に立った共感的理解・支援に基づく評を進める。(注14)

このような「今日的な」目標を実践指導の場に密着して探究するについて、「阿武郡国語同人会」が残した足跡には、学ぶべき点が多い。それは、単純に時の「経験主義」の側面を踏襲することでもなく、また、「はいまわる」批判に窺われる側面を反面教師とすることでもない。その真摯な情熱を、どこで捉え学ぶのか。

それは、すでに指摘されているように、「言語能力・思考能力・社会的経験のそれぞれがここでは密接に関わり合うものとして捉えられている点に注目したい。つまり、戦後国語科教育の出発点において、「経験」を重視するということがけつして「能力」を高めるということと切り離されて捉えられていたわけではなかったのである。児童・生徒の「経験」の拡充が、その言語能力及び思考力育成の基盤として考えられていたのである。」(注15)の観点からの謂いである。その意味での試行錯誤の中で苦闘であった。

その上での「今日的な」反省には、当時の次の厳しい卓論が一つの道を指し示している。「阿武郡同人会」の偉業を真の意味で次のように批判的に克服することが、今日切実に要請されている。

- (1) 随筆教材の扱いまで劇化しなければならぬか。
- (2) 「発展として」扱うとはどういうことか、どんなものをいかに発展させねばならぬのか。
- (3) 班別のしかた、その仕事の内容やわりあては適当だろうか。
- (4) 放送劇とは何かを、このこともたちは理解していたのか。
- (5) 批評のしかたについて

(6) 発言と、その伴奏的合いの手は何かならぬものか。

(7) 指導者のしめくりをいつも型のごとく最後に、説教じみてやらなければならぬものか、またその内容について。(注16)
これは、次のような厳しい批判から導き出されている。

○ 終戦後、どこの教室でも、若い初任教師の室でも、おしなべて学習活動が活ばつになつた。学習が自主的になつたことは、事実である。戦前のように、すぐれた練達の士のほかは、一般的に注入的講義にたよることが多かつたのに比べて、結構なことである。けれども、その現象的な活ばつさが、言語のやりとりの上の活ばつさにとどまつていて、内実の価値を多く伴わないとすれば、よくしゃべる子どもを作つたというだけのことだ。これでは、言語学習指導上からも、困つたことである。(中略)

ところが、アメリカ的な考えが、ドイツ的なものを追いはらつて、国語指導を、平易にし、児童中心・活動主義にしようとするにつれ、一般の指導者は、要するに、活ばつに生徒中心で授業が進行すればよいという、末端の原理をのみ尊重して、学習したこと、しようとするものの、価値を見定めようとしめない。国語教育の方法が、いくらアメリカ的でも、常識論の上に立てられるものではないのである。アメリカ的行き方が、「教えるべき観念的な体系」を捨てる代りに、「学んだことの具体的評価」を大事にして、いることを忘れてはならない。

私たちは、「新しい学力観」の思潮のもとに、今日、例えば、「一人ひとり」・「自己実現」等のスローガンのもとにあつて、すでになにがしかの「混乱」を経験しつつありはしないか。「阿武郡同人会」の「苦闘」の跡は、そこに「価値」を探究する精神と方法とを示してくれている。学んで、伐り拓きつづけたい。

注1 『新教育指針』第一分冊 第一部 前べん 新日本建設の根本問題 第三章 人間性・人格・個性の尊重 の三節に詳述されてゐる。

- 2 森下巖「国語教室の新生面——主として『読み方』に就いて」東京高等師範学校附属国民学校内 初等教育研究会編纂『教育研究』 復刊第二号 一九四六(昭和二二)年八月一日発行 所収
- 3 倉澤栄吉「国語と単元学習」教材研究会編『教材研究』第四卷第二号 一九四九(昭和二四)年四月一日発行 『倉澤栄吉国語教育全集』I 国語単元学習の開拓 所収
- 4 山本茂喜「昭和二十年代における国語科単元学習の再検討」香川大学国文学会「香川大学国文研究」第一三号 一九八八(昭和六三)年九月三〇日発行 所収
- 5 拙稿「山口県下の『新教育』実践に学ぶ(三)——『桜山プラン』の構造と国語教育——」山口大学教育学部研究論叢第四四卷 第三部 一九九五(平成七)年三月発行予定 所収
- 6 拙稿「山口県下の『新教育』実践に学ぶ(二)——『光プラン』単元学習における国語教育の位置——」国語教育叢の会『国語教育叢』第一〇号 一九九五(平成七)年三月発行予定 所収
- 7 八木哲人「会員は何を得たか——第三十二回研究大会管見——」山口師範学校教育研究所刊「学習指導」第三卷七月号 一九四九(昭和二四)年七月一日発行 所収
- 8 竹井彌七郎「カリキュラム構成の基本問題」山口師範学校教育研究所刊「学習指導」第三卷 第八号 一九四九(昭和二四)年八月一日発行 所収
- 9 手嶋倫典「九月の計画」山口師範学校教育研究所刊「学習指導」第三卷 第八号 一九四九(昭和二四)年八月一日発行 所収
- 10 末広真之「[現地報告]カリキュラム実践の現状と二三の気付き」山口師範学校教育研究所刊「学習指導」第三卷 第九号 一九四九(昭和二四)年九月一日発行 所収
- 11 下関市立桜山小学校著『生活学習研究 桜山教育プラン』一九四九(昭和二四)年十一月五日刊
- 12 山口大学山口師範学校光附属中小学校著『生活実践と実力養成のための 小中学校のカリキュラム』一九四九(昭和二四)年十一月一日刊
- 13 小河正介「小学校低学年に於ける文法学習」阿武出張所刊『阿武教育年報(小学校の部)』(加藤注。「昭和二五」とのみあり、発行月日未詳。)
- 14 文部省「小学校 国語 指導資料 新しい学力観に立つ 国語科の学習指導の創造」一九九三(平成五)年九月 同年一〇月一日初版第一刷
- 15 野地潤家・山元隆春解説「国語科目評論における『経験』と『能力』」『国語教育基本論文集成』I 国語科教育基礎論(1) 目評論 一九九四(平成二)年刊 所収 (平井晶夫「新しい国語教育の目標」一九五〇(昭和二五)年 新教育協会刊を踏まえた解説)
- 16 倉澤栄吉「国語学習の実際」一九五三(昭和二八)年一〇月二五日 新光閣刊 所収 初出掲載誌「学習活動」一九五〇(昭和二五)年六月号

(一九九四・一〇・一一記)